

裁判から見たこと —子どもに石を投げられて—

村の裁判

2009年2月の昼過ぎ、私はぱっくりと裂けた額を葉草とガムテープで強引に塞がれ、怒り狂ったホストファミリーに付き添われ、目の前で進む裁判を眺めていた。炎天下のなか、気遣いで誰かが用意してくれた椅子に座らされていたが、額からの大量の出血で意識は朦朧とし、群衆の飛ばすヤジが遠くに聞こえた。私の目の前では、3人の古老たちが石の上に座って裁判を進行している。古老たちを挟んで私の反対側には、沈鬱な表情の少年たちと泣き叫ぶ彼らの母親が立っていた。さらに、その周りを好き勝手にヤジを飛ばす村人たちが取り囲んでいた。何故、このようなことになったのか…私は頭を抱えた。

調査地について

当時の私はエチオピアでフィールドワークを始めたばかりの学生だった。元々、雑穀栽培や在来農法に興味のあった私は、植民地化された歴史がないため、開発が緩やかで在来作物や伝統文化が多く残るエチオピアを調査地とした。そし

て、たまたま調査対象としたのが、首都のアジスアベバから約550km南西に位置する、南部諸民族州デラシェ特別自治区(Dirashe special wareda)に暮らすデラシャ(Dirasaha)の人びとだった。

デラシェ特別自治区は、面積約15km²、人口約13万人を有し、標高2561mの山頂を有するグルドゥラ山塊と、その麓に広がる標高約1100mのセゲン溪谷平野からなる。村や畑の多くは標高1800m以下の乾燥した気候の低地に位置し、生業の中心も低地に置かれている。低地には年に2回の雨期があり、2～7月に平均500mm、8～11月に平均280mmの降雨がある。しかし、降水量の年較差は大きく平均に満たないことが多々あるため、生育に一定の水分が必要な野菜類やマメ類の栽培や、毎年一定量の穀物の栽培は難しい。そこで、農業を生業とするデラシャは、昔から耐乾性・耐病性に優れたモロコシ(Sorghum bicolor)を主栽培作物とし、一定の食料を確保してきた。さらに、デラシャはモロコシをアルコール発酵させることで栄養価を高め、これを主食として日常的に大量に飲むことで、野菜類やマメ類を摂れないことによる栄養不足を解消している。人びとは朝起きてから寝るまでの活動時間のうち4～6割を飲酒に当てており、酒を飲みながら畑仕事に励んだり、綿花から糸を紡いだり、談笑したり、チェスに興じて

過ごす。人びとは山塊斜面に石造りの要塞のような村を築き、そこに木と土でコロコロベットと呼ばれる小さな家を建てて、荷運び用のロバを飼い暮らしている。

Ga村のお金を欲しがると子どもたち

デラシェの村では、現在でも昔ながらの暮らしが続けられている。しかし、2006年から近隣都市とデラシェの行政中心地ギドレ(Gidole)をつなぐ幹線道路工事が開始したことで、他の地域から人や物、情報が入ってくるようになった。2009年に、比較調査のため2週間ほど標高約2000mに位置するGa村に住み込んでいた。Ga村は幹線道路の予定地上にあったため、2010年に取り壊されてしまった。Ga村に暮らしていた人びとは、政府から保証金を与えられ、他の村、もしくは新たな開拓地に移住した。私の印象ではあるが、滞在していた頃のGa村はデラシェ地域内の他の村と比べて治安が良くなかった。そして、他の地域からの来訪者に慣れているようであった。私が道を歩けば、子どもたちは「外人!!」や「お金ちょうだい!!」と大声で叫び、追いかけてまわってくる(写真①)。なかには石を投げってくる者もいる。これはとてつもないストレスで、いつも子どもたちが叫びながら追いかけてくるのを無視して逃げ回っていた。

石を投げられて額がパッキリ

Ga村に居る時は、お世話になっていたお宅の家族たちについて畑に行くのが日課だったが、その日は体調を崩していたため、一人で家の中で休んでいた。昼頃になると体調が少し回復し、朝、ホストマザーが、石鹸がなくなったと言っていたのを思い出したので、村内にある唯一の売店に出かけ、石鹸や食料などを購入した。そこまでは何の問題も無かったが、その帰り道で不幸なことに10代半ばくらいの少年たちの集団に見つかってしまった。彼らは私を見つけると、「ヘイ!!外人。お金をくれ」や「1ブル!!」と叫びながら私の方に駆け寄って来た。ちなみに、ブルとはエチオピアの通貨単位で、2009年頃の



写真①村の子どもたち

両替価格で1ブルは約12円に相当した。大した金額ではないのだが、今まで集団にお金をせびられる経験がなかった私にとっては、見知らぬ人びとがお金を求めて駆け寄ってくる様は恐ろしかった。いつもは走って逃げるのだが、本調子でないため、走る気力がなかった私はその場で、「お金なんてない!どっかに行って!」と叫び返した。私が言い返したので、彼らは一瞬ひるんだようだったが、一層語気を荒くして「マネー!マネー!」と言いながら絡んできた。そのうち、一人の少年が私の右腕をつかんできたので、咄嗟に振り払ったところ、いつものように周りの少年たちが石を投げってきた。

繰り返すが、私は体調が悪く本調子でなかった。そのため、私は石を完全によけることができず、石の一つが額に命中してしまった。頭にグワーンと衝撃を感じ、手の平で額を抑えると、血がべったりとついてた。勢いよく額から流れ出た血が左目に流れ込み、左の視界が黒っぽく濁り見難くなったので、大怪我をしたらしいということを自覚した。途端に、整った医療施設がない場所で怪我をしてしまったこと、自分が暴力を振るわれたことに対する恐怖に襲われた。自然と両目から涙があふれ、泣きじゃくってしまった。すると、騒ぎを聞きつけて近所の人たちが集まりはじめた。

額から血を流して泣きじゃくる外人を見て、

村人たちは驚いていた。私に石を投げた少年たちは、どさくさに紛れてその場から逃げてしまった。集まった人びとは、怪我の治療をするために、私を呪術師のお婆さんのお家に連れて行った。呪術師のお婆さんは他の人びとと同じく、コロコロベツトと呼ばれる伝統的な土と木、藁で作った一軒家に家族と暮らしていた。一緒についてきてくれたおばさんから渡された手持ち鏡で傷の様子を確認したところ、額はパッキリと割れ、そこから血が溢れ出ていた。私は自分の怪我を確認し、頭からスーっと血の気が引いていくのを感じた。すぐに、痩せていかめしい顔をした呪術師のお婆さんがやってきて治療してくれた。しかし、その治療法たるや、漫画に出てきそうな想定外の方法であった。まず、タライに汲んだ水で傷口をよく洗われ、アラケと呼ばれる蒸留酒を傷口にたっぷり振りかけて消毒された。ここまでは、通常の怪我の治療である。作業は荒っぽく、「痛い。痛いよ」と泣いて訴えたが、お婆さんは気にする様子もなく、傷口の周りに緑色の植物の匂いのするクリームのようなものを塗りたくった。さらに、お婆さんは、ぱっくり開いた傷口の両側の皮膚を指で思いつきつまんで、皮膚と皮膚がくっつくように固定した。この時、私は痛みのあまり、日本語で「やめてーや!」と叫んでお婆さんの手を叩いて暴れた。しかし、またしてもお婆さんは気にする

様子を見せず、平然とつまんで引っ付けた皮膚の上からガーゼのような布を押し当て、その上をガムテープで貼って固定した。これで傷の手当は、完了である。私は、朦朧とした頭で、「こんな斬新なガムテープの使い方があるとは知らなかった。ガムテープを開発した人もこんな用法があるとは思いつかなかっただろう…」と思った。衝撃的な治療であったが、額からあふれ出していた血は止まった。その後、化膿することも、傷跡が残ることもなく完全に完治したので、治療としては適切だったのだろう。

裁判開始

75

その後、私は呪術師の娘さんからコーヒーの葉のお茶を飲ませてもらい、木を組み合わせて作ったベッドに寝かされていた。大量出血したため、頭がふらふらしていた。数十分ほど経つと、ホストファミリーの子どもたちがやって来た。彼らは慌てた様子で私の腕をつかむと、モッラ (*mora*) と呼ばれる村内の集会所に私を連れて行った。デラシェの村には、辻々にモッラと呼ばれる石を組んで作った集会所が造られている。何か問題が起こると、デラシャはモッラに集まり、古老たちを中心とした話し合いが行われる。モッラの前には、大勢の人びとが集まっていた。

木の棒の先端にとがった鉄の突起が付いた

農具を持った男性が、人混みかをかき分けて走り寄ってくるのが見えた。怒り心頭のホストファザーだった。彼は、「何てことだ。お前にひどいことをした奴は捕まえたからな!」と叫び、一点を指さした。しかし、そこに居たのは犯人ではなかった。会ったこともない少年6人が胸の前に突き出した両手を荒縄でくくられ泣いていた。一旦は戻った血の気が、再び引いていくのを感じた。私は一生懸命、「私に石を投げたのは、あの子たちじゃないよ」とホストファザーに訴えた。しばらくすると、誤認逮捕された少年は解放され、真犯人たちが両手を縄でくくられて連れてこられた。道で見たときはふてぶてしかった彼らであるが、さすがに落ち込んだ様子であった。少年たちの側では母親たちが、「何でうちの子を捕まえるのよ!」と怒鳴り散らしていた。怒り狂うホストファザーに加え、騒ぎを聞きつけて集まった数十人の村人が好き好きにはやし立てていた。あまりにもひどい喧噪であったため、カラシニコフをもった警官たちがやって来て集まってきた野次馬を追い払うという、混沌とした状況であった。

私は、目の前で繰り広げられるおさまりのつかない様子に茫然としている間に、あれよあれよとモッラのそばに置かれた椅子に座らされて、裁判に参加することになってしまった。この裁判で私は Ga 村の置かれている複雑な状況を知る

ことができた。私は少年たちが、「お金頂戴！」と叫んで石を投げてくることをとても悲しく感じていた。アフリカやアジアの都市の治安は悪いことが多く、不良やナンパ目的の男たち、物乞いに絡まれることは頻繁にあるが、農村ではそのようなことはまずない。人びとの多くは純朴で、外からやって来た人に物乞いをしたり、攻撃的であることは減多にない。Ga村の状況は耐え難く、「何故、この村はこんなにがめつくて攻撃的なのか…」とノイローゼ気味になっていた。話を聞いていると、子どもたちがマネーと叫ぶのは援助機関の行動が深く影響していたことが分かった。Ga村はデラシェ地域の行政中心地であるギドレから徒歩でわずか30分に位置している。私がこの地域に来る前、援助団体から派遣された外国人が水道を引くためにギドレに暮らしていたようだ。彼らは山頂付近に大きなお屋敷を立てて、村びとにとっては高額な日給を支給して人を雇い、「マネー」と叫べば小額紙幣を渡していたらしい。そのため、Ga村の人びとは、外国人はお金持ちで恵まれているのだから、自分たちに職やお金、便利なシステムを与えるのは当然だと思っているようだった。また、デラシェ地域の多くの人びとが信仰するのはプロテスタントである。そして、プロテスタントの牧師が「持つ者は持たざる者へ」と説教しているのを「金持ちは蓄えがあるので、貧乏人は

金持ちからなら、お金を奪っても良い」と、誤った方向に解釈する者がいるようであった。学生である私も外国人であれば例外ではないようで、「マネー！」と叫べば、当然、お金を渡すと考えていたようだ。Ga村では、子どもだけではなく、大人からも服や食器、石鹸などを買ってくれとねだられたり、何かと小銭をねだられることが多かった。初めの頃は素直に従っていたが、お金ありきの関係を築きたくなかったので、できるだけ断るようになっていた。それをよく思わない大人たちは、子どもたちにお金を貰ってくるように指示していたようで、子どもたちは小遣い稼ぎと遊び感覚で私を追い回していたらしかった。また、石を投げてきた理由については、子どもたちの基本的な仕事は畑の鳥に石を投げて追っ払うことであるらしく、当てるつもりはなかったと話した。それを聞いて私は、「私は金づるで、畑に作物を食べにくる害鳥なのか…」と悲しい気持ちになった。結局、裁判は子どもたちと保護者達が謝罪して幕引きとなった。しかし、これは後で知ったことであるが、通常、村では怪我などを負わせると、治療費と賠償金が支払われるが、私は金持ちであるはずの外国人なため、謝罪だけで済まされたようだ。

一連の出来事に対する理解

のみであると考えて行動している。

砂野唯

一連の事件で、①他人によるものでも一度与えられた印象は消せないこと、②悪意と感ずることも彼らには当然の行動で悪意のもとでなされているわけではないこと、③彼らと寝食をともにしてはいても自分が内部、あるいはその社会に帰属する者ではなく、外から一時的に訪れた“別”の生き物と認識されていることを学んだ。そして、人びとの行動には外部からの働きかけがかかっていることは、確かである。お金をねだる行為は、援助団体の人に接さなければ生まれなかった行為である。また、お金を求めて石を投げる行為は、私にとっては悪意のある行為であるが、子どもにとっては遊びで、親たちからすればお金があるくせに分け与えない私が悪いということになる。そして、村の人と同じものを食べて同じ場所で眠っていても、村人は私が日本では異なった生活を送っていることを知っており、絶対に村人たちと同化はできない。フィールドで過ごすには辛い事実ではあるが、彼らを責めることはできない。彼らの認識や価値観は、悪意をもって形成されたものではないからだ。よそ者である私を泊めてくれたり、怪我を負わされると裁判を開いてくれたりと、善意も受けている。現在は、調査者である私は、彼らの価値観や倫理観を受け入れ、生活圏にお邪魔する